

『クノック』、もしくはパンデミックの記憶

永井典克

ジュール・ロマン (Jules Romains, 1885-1972) の『クノック もしくは医学の勝利』 *Knock ou le Triomphe de la Médecine* は、1923年12月15日にパリのシャンゼリゼ劇場 (Comédie des Champs-Élysées) にて初演された。主演はルイ・ジュヴェ (Louis Jouvet, 1887-1951) で、初演から数日もすると観客が押し寄せてくるほどの大成功を収めた。1948年の25周年記念までに、ジュヴェはクノックを1052回演じていたが、この年の1月12日の特別公演には、オリオール大統領とデルボ文化相さえ出席するくらい、国民的人気を誇る喜劇となっていた¹。50年にはジュヴェが主演して映画化された。『クノック』は、ジュール・ロマンという作家と、ルイ・ジュヴェという役者の代表作ともなっていた。今でも様々な劇団が取り上げて上演している様子を私達は確認することができる²。

この戯曲のあらすじは次のようなものである。

1923年、フランスの田舎町サン＝モーリスにクノック医師が到着する。

彼はネクタイ売り場のセールスマン、ピーナツの卸売を経由して医師になった人物で、金儲けをなによりも優先している人物である。彼のモットーは「健康な人間は、自分で知らないだけの病人である」 (*Les gens bien portants sont des malades qui s'ignorent.*) というもので、町中の人たちを騙すように病人に仕立て上げ、あっという間に大儲けをする。クノックを非難する医師ですら、彼と話をしているうちに、自分が病気だと思い込まされてしまう。

医者をも主人公とした喜劇であり、17世紀のモリエールの喜劇『病は気から』などと比較されることが多かったが、ジュール・ロマンの喜劇にはモリエールの喜劇にはない要素が含まれていた。1923年初演のこの芝

居には、数年前に世界中を襲ったスペイン風邪というパンデミックの記憶が色濃く反映されているのである。

1 クノックという名前

この芝居では「いかさま、いかさま師」(charlatanisme, charlatan)という単語がキーワードとなっている。この« charlatan »という単語の解釈が重要となってくるのだが、この単語は通常「いかさま師」と訳されるものであるため、ここではひとまず「いかさま師」としておきたい。

クノックという「いかさま師」がサン＝モーリスという田舎町で金儲けをする。これが『クノック』の物語の骨格にある。まずこの人物の名前に注目しておこう。

クノックはKnockというスペルで、フランス語では「クノック」と発音されるが、アカデミー・フランセーズの辞典によると、この単語は20世紀初頭に英語からフランス語に輸入された単語である。実際、18世紀の辞典リトレ *Littré* には登録されていない。何故、英語の単語に由来する名前を持つ人物が主人公なのだろうか。

この問題には一つの仮説がすでに示されている³。

1923年『コメディア』に出た評論の「我々は皆、クノックによってノックアウトされるようである」という文と、1949年にルイ・ジュヴェが講演会で言った「Knock とは英語で『叩く』という意味です。タイトルではありません。音、オノマトペアです。ボクシングの世界では、決定的な一撃のことで、相手を戦える状態ではなくすことです」という言葉から、クノックという名前はボクシングに由来すると初演当時から考えられていたとするものである。

実際、1920年代、ヨーロッパはボクシングなどの大衆文化をアメリカから輸入していた。第一次世界大戦で衰退したヨーロッパに対して、アメリカは空前の好景気の時代を迎え、ジャズや野球、ボクシングなどの大衆文化が形成されていた。もともと近代ボクシングは16世紀頃から

イギリスで完成されていったスポーツであり、フランスではイギリス式ボクシングと呼ばれている。このイギリス式ボクシングがアメリカで大衆文化のひとつとして成立していた。さて、1920年代のアメリカにおいて、9万人の観客を集め、初めて興行成績が100万ドルを超え、ボクシングの人気を決定的なものにした試合があった。1921年に設立された全米ボクシング協会（1962年から世界ボクシング協会 World Boxing Association）の最初の試合（7月2日開催）である。この試合ではジャック・デンプシー (Jack Dempsey) とジョルジュ・カルパンティエ (Georges Carpentier) が戦った。ジョルジュ・カルパンティエはフランス人で1908年から1926年までボクシング選手として活躍、ヨーロッパのチャンピオンとしてフランスでも人気のある選手であった。カルパンティエは残念ながらKO負けしたが、この試合はフランスでも当然、注目されていた⁴。したがって1923年の『クノック』の観客は、Knockという単語で21年のカルパンティエ VS デンプシーの歴史的一戦のノックアウト場面を連想したのであろう。また、20世紀初頭のフランスでは1920年に建設されたセントラル・スポーティング・クラブ (Central sporting club) でボクシングの試合がよく行われており、観客はKnockという単語を即座にボクシングと結びつけたはずである。

このようにもともとイギリス発祥のスポーツのボクシングがアメリカで大衆文化となり、ヨーロッパに戻ってきたものであるため、Knockという単語は、アメリカ文化の薫りがするものとなっていた。そして、クノックも、アメリカ式やり方を取り入れていると作中でも言われている人物であった。

クノックは、バルパレの医院を購入した時に値切らなかつたが、そのことについてバルパレは「私は、あなたの円滑なやり方 (rondeur) が大いに気に入ったのです。郵便だけで交渉をおこない、現地には契約書を持ってやってくるというやり方も気に入りました。まったく騎士のようでもありますし、アメリカ式のようでもありますね」(第一幕) と述べていた。1920年代、アメリカという単語は事業を円滑に (rondement) 行

うことを想起させるものだったのだ⁵。

このようにクノックという名前からは、アメリカ式に事業を円滑に行い、サン＝モーリスの人たちをノックアウトする人物というイメージが浮かび上がってくるのである。

2 原作者ジュール・ロマン

次にジュール・ロマンという作家がどのような人物であったかを振り返っておこう。

のちにジュール・ロマンとなるルイ・ファリグル (Louis Farigoule) は1885年8月26日、フランス南部の「中央高地」のある村で生まれた。父親がパリで教員をしていたため、パリで子供時代から青年時代を過ごした。

大学では文学を専攻したのち、1905年から06年にかけて兵役を務め、高等師範学校に入り、自然科学（植物学、生理学、組織学）を専攻。ブレスト、ラン、アミアンで教職についたが、第一次世界大戦で動員された。1919年に教職を去り、文学に専念するようになった。

ジャック・コポー (Jacques Copeau) が1913年ヴェー・コロンビエ劇場 (Vieux Colombier) を創立したとき、彼は演劇とは関わりを持っていなかったジュール・ロマンに俳優の養成を委託した。その結果、ジュール・ロマンは1930年代までは戯曲も書くことになった。しかし、演劇は彼の目指すものではなかったようである。1932年から46年にかけて全27巻の『善意の人々』 *Les Hommes de bonne volonté* という大河小説の執筆に専念し、これ以後、戯曲は書いていない。19世紀以来、多くの作家にとってそうであったように、この作家にとっても詩作品、小説こそが主要な仕事であり、戯曲はいわば余技のようなものであった。しかし、皮肉なことに、ジュール・ロマンの代表作は戯曲の『クノック』であり続けている。

反ナチズムを訴えており、第二次世界大戦時はアメリカに亡命。終戦

後は1946年にアカデミー・フランセーズの会員に選出され、帰国した。

さて、彼は高校に通っていた1903年に、後の作家生活をとおして影響を与え続けた特殊な体験をした。コンドルセ高校を出てすぐのところにあるアムステルダム通りで、彼は人間と事物を結ぶ精神的連続性があるという啓示を受けたのだ。彼はこれを後にユナニスム（一体主義 Unanimisme）に発展させていった。

これを正確に理解するのは難しいが、「個人ではなく、家族、群衆など集団としての人間の本質を外側からではなく、内側から捉えようとした思潮」と言える。そこで個人の意識は、集団の意識にぶつかり、そこに融合していく⁶。具体的には、ジュール・ロマンは1906年の『再生される町 一体主義的生活の物語』*Le Bourg régénéré, conte de la vie unanime* について、「この作品では、一人の主人公、一つの存在、一人の『私』だけに光を当てています。最初のページから最後のページまで、この一人だけが問題となるのです。しかし、それは一人の人間ではありません。それは一つの街なのです」と語っている⁷。つまり、「一体主義」においては、一人の主人公は一つの集団全体を表す。しかし、最初から主人公＝集団ということではない。主人公は集団とぶつかり、そこに融合していく。そして、このぶつかりあいにおいて、主人公の役割はしばしば「集団を麻痺状態から引きずり出す」ことにあった⁸。

これこそ、まさにクノックがサン＝モーリスで行ったことである。ジュール・ロマンの考え方に従えば、クノックの行為は、サン＝モーリスという町にぶつかり、この町の住人を麻痺状態から引きずり出していく。そして、ついにはクノックと町が一体化していく。その様子がこの『クノック』という作品では描かれていると読むことが可能となるであろう。

3 主演ルイ・ジュヴェ

演劇作品というのは書かれた状態が完成形ではない。それはほとんど

の場合、役者によって上演されるものとして存在している。演劇作品の解釈は、その作品が上演された状態の解釈を内包せざるをえないことになる。

『クノック』という作品も同じで、ルイ・ジュヴェという役者を抜きに語ることはできない。クノックはルイ・ジュヴェという役者の当たり役であった。20年代から50年代にかけて1000回以上も演じており、クノックのイメージはルイ・ジュヴェが作り出したものであった。しかし、クノック＝ルイ・ジュヴェという図式が完成した時、俳優と主人公の関係は極めて複雑なものとなる。ジュヴェ本人は、クノックとの関係を次のように述べていた。

クノック役をはじめて演じたのは私だったし、きょうもまた演じている。つきあいは長い。彼だか私だか、見わけはつきにくい。二人の関係をはっきりさせたとしても、クノックとはどんな男か、彼にとって私が何であり、私にとって彼が何であるか、うまく説明できる自信はない。

この複雑な関係から生ずる問題は、俳優の仕事にとってきわめて大きな問題だ。とりわけ、観客にとって私がクノックであり、私にとってクノックはまったく私ではないのだから、決して単純な問題ではない。それは何よりも俳優の問題だ⁹。

ルイ・ジュヴェは演劇だけでなく、様々な映画に出演しており、日本でもむしろ『舞踏会の手帖』 *Un carnet de bal*、『北ホテル』 *Hôtel du Nord* などの映画俳優として人気であった。しかし、ジュヴェ自身は、自分を映画俳優としてではなく、舞台俳優と考えていた。そして、彼の演劇生活を支えてくれたものがクノックであった。『クノック』がなければ、自分の「演劇生活はなかったかもしれない」と述べるほどであった。

『クノック』が私のために永らえたとするならば、私も『クノッ

ク』のために演劇生活を永らえることができた。これまで私は、どれだけ新しい試みをしただろう！ 『クノック』が救援の手をすぐ差し伸べてくれなかったら、どれほど失敗し、損害を蒙ったかわからない。

失敗のあと、私は『クノック』を必ず上演した。ほかのものが『アルルの女』や『シラノ・ド・ベルジュラック』、『椿姫』を上演したように¹⁰。

ジュヴェは、クロムランク (Crommelynck¹¹) の 1930 年の戯曲『黄金のはらわた』 *Tripes d'or* が大失敗し、客席にいる観客の数より差し押さえにきた執行官の数のほうが多い状況だったときのことを振り返っている。彼は、そのときの 13 人の観客のため『クノック』を上演することにした。その二日後、劇場はにぎわいを取り戻した。これこそがジュヴェにとって文学的評価とは異なるかもしれないが、この作品の評価にかんする「動かし難い証言」であった。

ジュヴェの舞台がどのようなものであったかは、私達は幸い 1951 年の映画で垣間見ることができるが、もう一つ、貴重な証言が残されている。初演当時、パリでジュヴェの舞台を観ていた日本人がいて、日本では早い段階で、彼の証言からルイ・ジュヴェの舞台とジュール・ロマンの評判を知ることが出来たのである。この人物は岩田豊雄 (1893-1969)、小説家、獅子文六の本名である。彼は小説家としては獅子文六の名前で活動したが、演劇の評論、演出家としては本名の岩田豊雄を使い続けており、演劇家としての功績も大きい。その岩田は、喜劇の演出をジュヴェに学んだとしている。

『クノック』は深い現代批評を含んでいるが、それを感じる観客も、あの芝居のコミックだけを喜ぶ観客も、両方が満足している。喜劇の演出とは、こういうものでなければならぬと、思った。いや、演劇の愉しさと、演劇の真実ということとを、区別したり、ある

いは反対概念のように考えることの愚昧さを、深く教えられたような気がした¹²。

岩田によればジュール・ロマンの芝居はことごとくルイ・ジュヴェが主演し、演技する約束になっていた。クノックという人物は、「それに扮するジュヴェの烏天狗みたいな顔」を除外して考えることができない¹³。演ずるジュヴェにとって、「彼にとって私は何であり、私にとって彼は何であるか」分からなくなっていたとしても、観客にとっては、クノックは「烏天狗みたいな顔」をしたジュヴェのイメージが刻印された存在であり続けたのである。

4 日本におけるクノックの受容

ここで岩田豊雄の文章を参照しながら、日本における『クノック』の受容についても触れておきたい。岩田の文章からは、1920年代のフランス演劇と日本演劇の状況を読み解くことができ、非常に興味深い。

第一次世界大戦後の1922年に、母親が死んで「天涯の孤客のような身の上となった」岩田はフランスに渡った。当初は何かを研究しようとしていたわけではなく、「日本にいたところで、どうもこうもならないと思って、渡仏の決心をしたので、フランスへ行って、ノタレ死にしてもいい」と思っていた¹⁴。初めてフランスの芝居を見たときにも、「遙々と海を渡ってきた人間に、こんな低級な芝居を見せる法はない」と彼は失望した。岩田の演劇への興味は、1920年代パリで活躍していたセルゲイ・ディアギレフが主宰したバレエ・リュス（ロシア・バレエ Ballets russes）を観てのことである。バレエ・リュスや芝居を見ることや聞くことに専念し、その研究を日本に持ち帰ったら、「なんとかウダツの上る道があるかも知れない」と思うようになったのである。この岩田が『クノック』と出会った1923年頃には、彼は「演劇研究家のハシクレ」となっていた。ジュール・ロマンの作品は、「パリの四個の劇場が、四

篇の彼の作品を同時に上演」するほど人気となっており、岩田はこの作家が「近い数年間にわたり、フランス文壇の最も注目すべき存在となるだろう」と予言した。『クノック』は記録破りの興行成績を挙げ、批評家は作者をモリエールになぞらえた。これはモリエールと同様に医者を取り扱ったからだけではなく、作者の「広大な喜劇技巧に対する賛辞」でもあった¹⁵。『クノック』に衝撃を受けた岩田は、同時に「喜劇に対する尊敬や愛情」をルイ・ジュヴェの仕事を通して獲得した¹⁶。

帰国してからも、1927年（昭和2年）に岩田は新劇協会の人々と共に、『クノック』を舞台へかけているほどで、彼のクノックへの愛着は深いものであった。またその後も獅子文六として小説を書くだけでなく、岩田豊雄として岸田國士、久保田万太郎と共に文学座を創立する（1937年）など演劇に深くコミットしていった。

先述したように岩田はジュール・ロマンの芝居はジュヴェを除外することはできないと考えていた。そのため、1927年に『クノック』を上演した時、彼は自分が演出する『クノック』を「下手な我流を持ち出すより万事シャンゼリゼエ座を真似するに限る」とフランスの舞台のコピーを行った。しかし、彼の演出は「コッピイするとは何事であるか、わが国におけるクノックはすべからく日本魂を具備せねばならんのである」と雑誌で酷評されることになった。

フランスの戯曲を日本人が「日本魂」を持って演ずることに岩田は違和感を持っていたようで、例えば「肩をすくめて両手をひろげる」という動作が、日本の役者では「ひどく間がのびる」と不平を述べていた。岩田自身、フランス風の手本を示したが、初日に見物に来たフランス文学者の辰野隆にすぐ発見されて、「君、あれは何です、あの牛屋の姐さんがナマのおかわりを持ってくるようなゼスチュアは？」と言われることになった。岩田はその結果、フランスのものをそのまま日本で上演しようとする「舶来主義の非」を悟っている¹⁷。

このようにコピーが非難されたとしても、岩田の証言は、私達にとっては逆にフランスにおける『クノック』の演出を伝えるものとして貴重

な記録となっている。第3幕でクノックが石鹸で手を洗う場面がある。この場面は1951年の映画でも確認できるものだが、これは初演頃から舞台上でも実際に行っていたものらしい。役者のルイ・ジュヴェは薬剤師の資格を持ち、第一次世界大戦中も医師のアシスタントとして従軍していたが、この石鹸での「終わりのない、いらだたしい」手洗い行為を、この外科医から借りたものであると証言していた¹⁸。スペイン風邪から数年後のヨーロッパにおいても石鹸で延々と手洗いをするということは新鮮なものであったようだ。この場面を岩田は次のように説明している。

第三幕にクノックが手を洗いながらパルパレエと話す医師的に入念な手の洗い方、真っ白な石鹸のあぶくが花束のようにふくらむ。それを始末しながらいろいろの動作で、あの長い対話の単調を救う、というのがパリで見た型である¹⁹。

ただ、この石鹸のあぶくが「洗濯石鹸から髭剃り石鹸までためした」が日本ではまだ出来なかった。岩田は結局、「その幕に出ない若い俳優の一人が、自ら進んで楽屋で頭を洗う」ことで泡を毎回作り出すことにした。名案ではあるが、「マチネエのある日には日に二回も髪を洗わねばならぬ身にもなってみたまえ」と彼はぼやいている。

さて、岩田はクノックをはじめジュール・ロマンの演劇作品だけでなく、フランス演劇作品を多く翻訳し、日本に紹介しており、日本における初期のフランス演劇受容に重要な役割を果たした。岸田國士は「世の識者を感嘆せしめ、記者の名を頓に高からしめた」戯曲の名訳は辰野隆、鈴木信太郎訳の『シラノ・ド・ベルジュラック』が代表としてあるが、名訳者の「光栄ある名前」には岩田の名前が付け加えられるべきだと彼の翻訳を高く評価していた。岩田の翻訳は『「仏蘭西の俳優が日本語で演ずるとしたならば」、かうも訳すべきだといふ訳し方』であり、「翻訳戯曲の類を絶したもの」だと岸田は敬服したのである²⁰。

5 クノックの物語

それでは、クノックとはどのような人物であろうか。

この人物は捉えどころがなく、「長いなじみで、唯一の正当な代理人である」役者のジュヴェエにとっても、クノックは「謎」の存在であり続けた²¹。

まず、台本における人物の表示の問題がある。例えば第一幕ではパルパレ医師、パルパレ夫人、クノックが登場するが、パルパレ医師は「医師」(Le Docteur)と示されているが、クノックは「クノック」としてしか示されていない。つまり、作者はパルパレ医師は医師であると確約しているが、クノックが本当に医師の資格を持っているのかは、作中人物であるクノックの証言に頼るしかない状態に私達は置かれているのだ。

クノックは作品が進むにつれ、ますます捉えどころのない人物となっていくだろう。唯一確かだと思われることは、クノックにとって金儲けが重要であったということだ。

20年ほどまえ、ロマンス言語の研究を諦めなければならなくなったクノックは、マルセイユの「ダーム・ド・フランス」のネクタイ売り場で働いていた。「ダーム・ド・フランス」(Aux Dames de France)とは、1898年に作られたフランスのデパートチェーンである。ここで仕事を失い、港を歩いていたところ、彼はインドへ向かう1700トンの蒸気船で医者を求むという広告を見た。医者への学位は要求されていなかったため、彼は即座に船医の地位に応募することにした。

船を降りてから数年間は「アラシッド(arachides)の貿易」をしたと彼は言う。パルパレ夫人は理解できずに聞きかえすが、これはピーナツ(cacahuète)のことである。ピーナツとわずに、「アラシッド(arachides)の貿易」と言ってしまうところにも、クノックの「いかさま師」的性格が表されている。このピーナツの販売業でも、彼は小売店ではなく、卸センターを作りだしており、10年ほど続けていたら百万長者になったであろうと豪語するほどの規模のものであった。彼の金稼ぎの能力は

天性のものであった。しかし、金稼ぎの天才にとって、ピーナツの卸センターのような仕事は長く続けていくと退屈するものでしかない。彼は「本当の仕事」である医学を志すようになった。

全く本当の仕事というのは医学にしかありません。もしかすると政治、経済、宗教もそうかもしれませんが、まだ試したことがありません。

第一幕

ここで注意しなければならないのは、「本当の仕事」として同列に挙げられているのが医者、政治家、金融家、聖職であり、すべて「いかさま師」が暗躍し、金儲けをすることができるだろう職業だという点である。

金儲けがテーマの一つとなる以上、話題になる金額について大体的目安が必要となるだろう。すでに100年前の芝居でもあり、物価が現在と異なっている。台本には時代設定が書かれていないが、スペイン風邪が数年前にあったと説明されている点と、51年の映画版では「舞台は1923年」と字幕で説明されている点から、1923年が舞台であったと考えて良い。そこでまず芝居の舞台となった1920年代から30年代フランスの物価について確認しておくことにする。

地方労働者	610 フラン
パリ地方冶金工	1125 フラン
地方郵便配達人	933 フラン
新人教員	875 フラン
新人裁判官	1833 フラン
陸軍・空軍少尉	1260 フラン
大学教授	4000 フラン
陸軍・空軍中佐	4300 フラン

表1 1930年代 月収の例²²

この表を参考にしながら、ジュール・ロマンの1923年の喜劇『ル・トルアデック氏の放蕩』*Monsieur Le Trouhadec saisi par la débauche* を読んでみると、問題となっている時代の大体の金銭感覚が分かってくるだろう。

大学教授、学士院会員で有名な地理学の教授ル・トルアデック氏は、ロオランドという女優に惚れてモンテ・カルロまで追いかけてきた。彼は友人の紹介でロオランドと自動車で市内散歩（1回125フラン）するまでこぎつけたが、すぐお金が足りなくなる。ロオランドはル・トルアデック氏に21金でダイヤモンドとガーネットが6つずつついた腕輪をせがむ（6500フラン）。ル・トルアデック氏はやけになりカジノで賭けをしたところ、10万フランの儲けを出した。すると賭け事の専門家で『秘伝公開』50フランという著作があるという作家が、自分の著書に名前を貸してくれれば即時払いで1万フラン、年賦で5千フランずつ計5万フラン出そうと提案してくる。ル・トルアデック氏の名前を使うことで箔をつけようというのだ…。

『クノック』では、サン＝モーリスの世帯数は2853だが、1502世帯は年収1万2千フラン、月収では1000フランを超えており（第3幕第6場）、この層をターゲットにするつもりだとクノックは宣言している。クノックは、パルパレ医師から医院を数千フランで譲り受けていた（第1幕）。クノックは、町の「太鼓たたき」（*tambour de ville*：太鼓をたたいて公告を触れて回る役人）に医院の宣伝を頼むが、その代金が5フラン（第2幕第1場）。医院の一回の診察料は8フランだが、クノックは裕福な農場主の治療に3000フラン要求する。これは子牛（4～500フラン）2頭、豚（1000フラン）2頭の代金に相当した（第2幕第4場）。この治療は後述するように数十年前に梯子から落ち、その後遺症として疲れやすくなっていると診断した農場主に対するものであった。疲労回復にこの地方の裕福な層の月収で3ヶ月分を要求するのがクノックの値段である。

では、物語を詳細に見ていくことにしよう。

第1幕

第1幕の舞台は、クノックが駅に到着し、パルパレが車でサン＝モーリスまで連れて行く間の、1900年から1902年に製造された古い車の中である。パルパレはこの車に板金を継ぎ足して最新式のトーピード型にしている。車は小さな駅から出発し、長い山道を登るが、途中で故障して何回か停まることになる。

道中、クノックはこれから初めて訪れるサン＝モーリスに、どのような患者がいるかをパルパレ医師に尋ねる。

医師：

リウマチ患者しかいませんね。

クノック：

それは興味深い。

医師：

リウマチを研究したい人にはそうですね。

クノック：

患者 (la clientèle) のことを考えていたのですが。

医師：

そちらはいません。このあたりの人は、リウマチで医者には行きませんよ。

雨を降らせるために、司祭さんのところに行かないようなものです。

ここでサン＝モーリスはリウマチを研究したい人には最適な場所だ

とパルパレ医師が答えたのに対して、クノックは「患者」la clientèleのことを考えていたと返事をする。la clientèleはclientの全体であるが、clientという単語は、古代ローマにおいて貴族などの保護を受けている人々を表した。現在では弁護士・公証人の依頼人、医師の患者、商人の顧客など広い意味を持つ。クノックがla clientèleという言葉を使う時、それは「患者」ではなく「顧客」という意味で使っている。

クノックはリウマチのほうですることがないのならば、肺炎とか肋膜炎で「埋め合わせない」といけないと「顧客」の心配をする。

医師：

それもまれですね。ご存知のように、このあたりは気候が厳しいですから、虚弱な新生児は半年で死んでしまいます。勿論、医者には手出しが出来ません。生き残った人間はたくましいですから、煮ても焼いても食えません。それでも、脳卒中とか心臓病の患者はいますね。そういった人は50歳くらいで、まったく予期してない時に突然、死にます。

クノック：

しかし、急死する患者を診て、財産を築いたわけではないでしょう？

医師：

勿論、まず...風邪があります。

それもただの風邪ではありません。ただの風邪では患者はまったく心配せず、むしろ汚れた体液を外に出すと主張して喜びますからな。私が言いたいのは、世界規模に伝染していく風邪のことです。

スペイン風邪は作品の理解に不可欠な要素であるが、この点については後述することにしよう。

さて、ここで明白になるのは、クノックは確かに金儲けを重要視するが、パルバレ医師も金勘定する人物であるということだ。患者の殆どいない医院を数千フランで売りつけられたことに気がついたクノックは辛辣になっていく。

クノック：

定期的な患者にはどう対応していますか？

パルバレ夫人：

定期的って何のことでしょう？

クノック：

週に数回とか、月に数回、往診する患者のことですよ。

パルバレ夫人：(夫に)

こちらのお医者さんがおっしゃっていることを聞きましたか？

まるでパン屋か肉屋のように定期的にお客さんがくるというのかしら。

このかたはまるで初心者ね。幻想を抱いているわ。

医師：

信じていただきたいのですが、ここの患者は最高ですよ。なにしろ、他人から影響されない人生を医者に送らせてくれますからな。

クノック：

他人から影響されない人生ですか？ それは結構ですな。

医師：

説明しましょう。私が言いたいのは、何人かの患者の状況に頼らな

い生活を送れるということです。患者というのは、いつ治ってしま
うかわかりませんし、亡くなった場合も収入が激減してしまいます。
皆に頼れば、誰にも頼らないですむということです

クノック：

つまり、私は釣り竿や釣り餌を持ってくるべきだったということだ
ですか。[中略]

医師：

一言言わせてください。あなたはどうも間違った印象の犠牲になっ
ているようです。

クノック：

どちらかという、私はあなたの犠牲になっているようですが。ま
あ、私は嘆く習慣を持ち合わせていません。騙されたときは、自分
だけを責めますから。

パルパレに騙されたクノックは宣言どおりに嘆くこともせず、すぐに
20年前から実践している診察・治療法をサン＝モリスで試してみよう
と考え直す。パルパレ医師は、今年の夏に学位論文を提出して、医師に
なったばかりのクノックが20年前から医学を実践しているというのは
おかしいではないかと指摘する。

クノックはたしかに学位論文を提出したのは今年の夏だと認める。こ
の学位論文は8つ折り版で32ページの『健康と称されている状態につ
いて』という題がついていた。彼が「健康な人間は、自分で知らないだ
けの病人である」という考えを展開した論文である。この考え方に従え
ば、全ての人間は病気ということになる。クノックは20年前に医師の
資格が必要とされなかったインド向け蒸気船の船医時代に、すでにこの
考え方に基づく医療を実践していたのだ。

パルパレ医師が、知識が全くなかったのにもかかわらず、船医を務めたのかと驚くと、クノックは否定する。彼は子供の時から、熱心に新聞に掲載される医者や薬局の広告、両親が買っていた薬用シロップの瓶や錠剤の箱に貼り付けてある「使用方法」を読み込み勉強しており、9歳のときには、すでに便秘時の便の不完全な排出に関する説明をまるまる暗唱できたほどだ。これらの文章は、「医学の真の目的と精神」を浮き彫りにしてくれた。大学教育は、逆に雑駁な知識で「医学の真の目的と精神」を隠しているもので、彼には不要なものであった。勿論、子供時代から彼が勉強に用いた教材は全て広告や商品であるため、彼がそこから体得した「医学の真の目的と精神」は「金儲け」の精神であったことは言うまでもない。

さて、インド行きの蒸気船で、すでに彼はこの精神を活用し、乗務員・乗客の全員を病気と診断することに成功していた。彼の病人というのは通常では健康な人間とされる人たちであり、当然、死者は一人も出していない。クノックは「死者数は減少させるべき」だと主張する。しかし、同時に医者は「病人の維持」la conservation du malade に努めるべきだと話す。パルパレ医師もその意見に同意するが、彼らの考えは食い違っていた。「病人の維持」という言葉で、パルパレ医師は「病人の生命の維持」を想像したが、クノックが「病人の維持」と話す時、それは「病人が病気の状態で維持されること」、すなわち患者が医者が必要としつづける状態を意味していた。

このクノックのやり方にも弱点があるとパルパレ医師は指摘する。

全員病気と診断してしまうと、航海に必要な船員の確保が不可能になり、航海が続けられなくなってしまうではないか。しかし、クノックは、この航海時に病人の「交替制」を思いついていた。経験を積んだ今や、サン＝モーリスで、ホテル、薬剤師、教師など彼の仕事に必要な人を病気と診断することもないであろう。

第2幕

クノックがサン＝モーリスで最初にしたことは宣伝である。彼は町の太鼓たたきを呼び寄せ、前任者の仕事具合を確認した。勿論、前任者は太鼓たたきを用いて宣伝をしたことなどない。さらに太鼓たたきは、パルパレ医師は患者が10回行くと9回は「なんでもないですね。明日にはピンピンしていますよ」と言って追い返すだけで、残りの1回も診察に8フランもとっているのに4スーの薬、それもハーブティーだけしか処方してくれなかったと不満を述べる。医者がいなくても、「どんな馬鹿でもカモミールティーくらい飲める」のだ。そして、パルパレ医師は町に市が立つため、あらゆる人が町にやってくる月曜日にしか開業していなかった。クノックは逆に客を呼び込むため、月曜日に無料診察の時間を設けることにし、次の宣伝文を告示してもらうことにする。

パルパレ医師の後任であるクノック医師がサン＝モーリスの人々に挨拶いたします。

博愛の精神から、着任の挨拶として、そして、かつてはあれほど健康的であったにもかかわらず、数年前からこの土地を襲っているあらゆる病の憂慮すべき進行を食い止めるため、毎週月曜日、9時30分から11時30分まで無料で診療をおこないます。この診療は郡の住人に限られます。郡の住人でない方の診療は、通常通り8フランといたします。

この理由をクノックは、自分は金稼ぎをしたいと思っているのではない（そうであるならば、パリとかニューヨークで開業していたであろう）、自分が望んでいるのは「人々が健康に気をつける」ということだと言う。まず博愛の精神を持つ医師であるという良いイメージを植え付けようというのだ。ただし、ここで「人々が健康に気をつける」と言う単語は *se soigner* という動詞を使っている点に注意したい。これには「健康に気をつける」という意味と「医者にかかる」という意味があるからだ。

自分も無料診察してほしいと思った太鼓たたきは、「夕食をとったときに、時々、むずむずするような感じがするんですよ。くすぐったいというか、ちくちくするというか」と症状をうったえる。

クノック：(精神を集中しているかのように)

ちょっと待ってください。混同してはいけません。くすぐったいのですか、ちくちくするのですか？

太鼓たたき：

くすぐったいです。(しばらく考えて)

でも、やっぱり少しちくちくします。

しばらく診察した後、クノックは沈んだ面持ちで「子牛の頭のドレッシングあえを食べた時に、よりちくちくしますか？」という質問をする。「子牛の頭のドレッシングあえ」のような料理は町の太鼓たたきは食べたことがないであろうし、そもそも何故この特定の一品が重要なのかも分からない。太鼓たたきは真面目に「それは食べたことはありませんが、食べたときは、きっとよりちくちくすると思います」と返事をする。クノックは「なるほど、それは重要だ」と返事をする。「子牛の頭のドレッシングあえを食べた時によりちくちくする」ようでは、太鼓たたきはさらに検査をする必要がある。しかし、それほど心配もない。彼にはまずは医院の宣伝をきちんと終えてもらわないといけな。その後は安静にして次の診察を待てばよいだけのことだ。

太鼓たたきの次にクノックは、自分の仕事に必要な人物と考える（したがって病気にすべきではない）小学校教員ベルナルに会うことにする。町の人々には、まず病気の怖さを知ってもらい、診察を受けて病気になってもらう必要があるからだ。そのために講習会を開催することで、公衆衛生の教育を行おうと考えた。そして、講習会のパートナーとして最適なのが小学校教員のベルナルであった。

クノック：

あなたなしでも、私は患者の治療をすることができます。

しかし、病気に関してはどうでしょう。誰が、病気と戦い、病気を狩り出す私の手助けをしてくれるのでしょうか？ 誰が、人体を刻々と包囲しつつある危険について、ここの気の毒な町の人々に教えることができるのでしょうか？ 誰が、死んでから医者を呼んではいけないと、彼らに教えることができるのでしょうか？

前任者であるパルパレ医師は何もしていなかったし、町の人たちは細菌とは何かすら知らないではないか。町の人々は衛生的に見ても、病気予防の観点からしても、誰の助けもないままに取り残されている。「人々は水を飲むときにも、一口ごとに無数のバクテリアを飲み込んでいるということを知らない」状態にある。このような人々の無頓着な状態をなんとかしないといけないと主張するクノックにベルナルは圧倒され、助力を約束する。

ベルナルの次にクノックが自分の仕事に必要なと考えたのは町の薬剤師ムスケであった。当然、この薬剤師も病気になることはないだろう。

クノック：

私にしてみれば、一級の薬剤師に頼ることができない医者は、大砲なしで戦場に向かう將軍のようなものですね。

クノックは薬剤師を味方に引きずり込むため、彼が前任者の仕事で一番不満に思っていたであろうことに切り込んでいく。報酬である。薬剤師のような職業は当然の報酬として1年で最低2万5千フランは得べきだと話をする。月に2千フランというのは、先程の表1によれば、新人裁判官と同程度ということになり、かなりの高報酬であった。ムスケはその半分もいけば良いほうだと返事をする。前任者は良い人ではあつ

たが、処方箋が束になるよう仕事はなかった。それに町の人々皆が病気にならないかぎり、医者も薬剤師も儲けにはならないだろうと彼は懐疑的である。しかし、クノックはムスケのそのような返事を一蹴する。「病気になる」とか、「健康」という考え方そのものが古い考え方だ。

クノック：

「病気になる」というのは、古い考え方で、現在の科学的データの前ではもはや通用しません。「健康」なんてのは、単なる単語で、我々の辞書から消し去ってもなんの問題もありません。私は、多少なりとも進行中で急速ななんらかの病気にかかっていない人は知りませんね。勿論、彼らが健康であるとあなたが言ってあげれば、彼らは喜んであなたを信じるでしょう。しかし、それではあなたは彼らを騙していることになる。そういった場合で唯一許されるのは、すでに患者が多すぎて、新しい患者を受け入れる余地がないというときだけです。

ムスケもこのように断言するクノックに喜び、協力を約束する。こうして仕事に必要な人物たちと関係を築き上げた後、クノックは仕事を始めることにした。まずは裕福そうな女性農場主が医院を訪れてきた。クノックは症状ではなく、農場の経済状況の確認から始める。

女性：

リュシェール街道に大きな農場がありますが、そこに住んでいます。

クノック：

その農場はあなたのものですか？

女性：

そうです、夫と私が所有しています。

クノック：

あなた達が自分で運営しているとすると、仕事もたくさんありますね？

女性：

そうなんですよ、18頭の雌牛に2頭の子牛、2頭の雄牛、雌馬、子馬、6頭の雌ヤギ、12頭ほどの子豚、それに鶏小屋もあります。

クノック：

それは大変だ！ 使用人はいないのですか？

女性：

勿論いますよ。3人の作男と女中が1人。

収穫期には季節労働者もいれています。

この女性は疲労感をうったえるが、これだけ忙しい農場主ならば当然疲労感くらいあるだろう。クノックは、「あなたは疲労感とお思いでしょうけれど」と意味有りげな台詞を言った後に、診察し、「小さい時に、梯子から落ちませんでしたか」と質問をする。農場で育てていれば、当然、小さい時に梯子から落ちたことがあるだろう。このような会話は「いかさま師」の常套手段であることは言うまでもない。農場主はしかしくノックの話術にはまっていく。クノックは、梯子から落ちたことこそが不調の原因であると主張する。

クノック：(聴診を続ける)

思い出してみてください。大きな梯子だったはずですが。

女性：

そういうことがあったかもしれません。

クノック：(断言するように)

3メートル50センチほどの梯子で、壁に立て掛けられていた。あなたは後ろ向きに落ちたのです。幸いに、左側の臀部が衝撃を受け止めています。

このように断言するクノックを前にして、農場主の女性は確かにそのような出来事があったと確信してしまう。クノックの治療は受け入れなければならない。その治療に関しても、クノックは治療にかかる金額を説明する前に、まず子牛と豚がいくらで売られるのかを尋ねる。クノックは患者の収入に合わせた治療を提供することをモットーとしているからであった。子牛と豚の値段を確かめたクノックはようやく「治療にはだいたい2匹の豚と2匹の子牛分くらい」かかると告げる。驚愕し、もう少し安く治療できないかと尋ねる女性に対して、クノックは、1週間様子を見てみましょうと話す。その時の調子から、患者自らが判断すべきだと言うのだが、処方箋は以下のようなものとなる。

クノック：

帰宅したら、すぐ床についてください。できるだけ一人でいられる寝室にしたほうが良いでしょう。太陽光が邪魔にならないように雨戸とカーテンは閉めさせてください。人があなたに話しかけるのは禁止です。1週間は固形物を摂取しないように。ヴィシーの水を2時間ごとにコップ1杯、最大限譲歩して朝夕に少量の牛乳に浸したビスケットを半分食べても構いません。しかし、できたらビスケットは省いたほうが良いでしょう。さあ、これで高価な治療を処方しているなど言えませんよね。1週間後に、気分がどうか確認しましょう。

1951年の映画版では、クノックの話を聞いているうちから、元気をなくしていく農場主の姿を確認することができる。固形物をなにも摂取しないで1週間後に元気一杯ならば病気ではないと診断できるということならば、病気でない人はいないだろう。

次の患者は没落貴族階級の婦人でクノックは最初から愛想よく対応した。婦人は昔は良かったという話をひとしきりした後、貴族が力を持っていた昔と違って、最近ではよく眠れないと話す。クノックは聞き逃さずにすかさず不眠症は深刻な意味を持つことがあると誘導する。

クノック：

不眠症にはもう長いこと悩まされているのですか？

婦人：

随分長いことになりますわ。

クノック：

パルパレ先生には相談されましたか？

婦人：

ええ、何度か。

クノック：

彼はなんと言っていました？

婦人：

毎晩、民法を3ページ読むようにと。冗談のつもりだったのでしょ
うね。真面目に話を聞いていただけなかったです。

クノック：

彼は誤診している可能性がありますね。不眠は、極めて深刻な意味を持つときがあります。

上流階級の義務として開業したての医院を表敬訪問したつもりだった婦人もまたクノックの話術に陥落し、治療をすすんで望むようになった。没落したとは言え貴族階級であり、資産はたつぷりとある。治療もスペシャルなものとなるだろう。クノックは治療には、「規則正しい治療を長期行うこと」が肝心だと話す。「近代的メソードに従った治療を受けるだけの時間も財力もないような普通の患者には、このような希望を与えるようなことはしない」が、この患者の場合は話が異なる。2年から3年の間、ほぼ毎日放射線治療をおこなう必要がある。放射線治療は、放射線研究によってマリ・キュリーがノーベル物理学賞を1903年、ノーベル化学賞を1911年に受賞したばかりで、最先端の治療を受けることができる」と婦人は大いに喜ぶのであった。

この金と時間がかかる治療を必要とする患者と対照的なのが次の患者であった。クノック医師の診察をからかいに來ただけの町の酔っぱらいの二人組だ。待合室でも彼らの振る舞いに皆が笑っていた。クノックの診察は、短く、彼らにはなんの希望も持たせないものとなる。

クノック：(乱暴に診察したあと)
まだお父上は健在ですか？

一人目の男：
いや、死んでるよ。

クノック：
急に亡くなられた？

一人目の男：

そう。

クノック：

そうでしょう。それほど年をとっていたというわけではありませんね。

一人目の男：

49 歳だったよ。

クノック：

そんなに長生きでしたか。

長い沈黙のあと、二人の男はもう笑う元気がなく、ぐったりとしている。診察を終え、恐怖に引きつった顔で診察室を出てきた二人組を見た人々はまるで埋葬のときのように突然静まり返り、笑うことはなくなる。彼らはクノックの診察が笑い事ではなく、生死にかかわることだと認識したのだ。

第3幕

開業から3ヶ月後、パルパレ医師がクノックに売り渡した診療所の代金を受け取りにきた。彼は町の変化に驚く。増え続ける病人に対応するため町のホテルは、病人を受け入れる施設になっていた。ホテルはさらに改装も予定している。ホテルの使用人も、3ヶ月前まで町の医師であったパルパレのことを知らず「予約された病人」と勘違いをするほどだ。自分が医師であると告げるパルパレを、使用人はさらに「クノック先生のアシスタントに来た医師」だと思い込んでしまう。クノック先生にはアシスタントが必要だからだ。

ホテルの支配人のレミ夫人はパルパレ医師にクノックの生活ぶりを話す。彼女はパルパレ医師には「パルパレさん」Monsieur Parpalaid と呼び

かけるが、クノックのことは「先生」Docteur と呼ぶが、ここに町の人々が現在どう考えているかが現れている。クノック先生は起きるとすぐに往診に駆け回り「囚人のような生活」をしている。医院で診察をしたあとは、「素晴らしい新車」を全速力で走らせ郡の端のほうまで往診に出かけているので、何度かはサンドイッチをつまむ時間があるかないかの生活をしているのだ。それに対して、「パルパレさん」はサン＝モーリスにいるとき、ビリヤードの試合をするなどして安穩とした生活を送っていましたねとレミ夫人は嫌味を言う。

パルパレが「ここの住人が健康であるのに飽きてしまい、病気になるという贅沢をしたいというのであれば、遠慮なくすればよいのではないですか。クノック先生にとっては利益にしかありませんから」と返事をする、レミ夫人は興奮して、クノック先生が利益を求めているなどと言うのは許せないと言い放つ。パルパレがやろうともしなかった無料診察をクノック先生はしているではないか。それに、クノック先生は財力のある人には支払いを求めるが、貧しい人からは何も受け取らないのだ。クノック先生は利益を追求しているのではない。金持ちからは搾り取るが、貧乏人からは取らないというのは、クノックが自分の利益を最大化するために編み出した手法であるが、公共の利益とも合致するものとなっていたのだ。

また、20年前のインド行きの船で皆を病気にしたときの教訓から、今回は仕事に必要な人間（ホテルの支配人、薬剤師、小学校教員）は病気にしないということが実践されていることが分かる。

レミ夫人：

クノック先生が、病気でない人にも病気を見つけるなんてことも言わないでくださいね。

まず、私ですけれど、先生がこのホテルに毎日往診に来るようになってから、10回は診察していただきました。毎回、先生は根気よく、あらゆる器具を使って、つま先から頭のとっぺんまで聴診して、

15分は費やしてくださいます。クノック先生は、何もないし、心配することはない、よく食べて、よく飲みなさいと仰ってくれます。それで1センチも受け取ってくださらないのです。教師のベルナルさんも同じです。彼は自分が病原菌を運んでいると信じてしまっ、生きて心地がしていなかったのですが、彼を安心させるため、クノック先生は3回も、排泄物を検査してくれたのですよ。

町の変化に驚いているパルパレにクノックは医院を引き継いでからの成績を説明する。まず来院者の数は10月半ば37、10月末90、11月末128、12月末150超と順調に増えている。しかし、診察というのは、今やクノックの興味を惹くものではない。診察は初歩的な技術であって、「魚を網で捕らえるようなもの」でしかない。治療行為こそ「魚の養殖」であり、重要なのだ。患者も力ずくとか、強制で連れてきたものではない。全員がクノックの診察・治療を目当てに自発的にやってきている。そのような状態を作り上げることこそ、クノックのメソッドの真骨頂なのである。

治療代についても、クノックは郡2853世帯のうち1502世帯は年収12000フランを超えているが、年収12000フランに届かない家庭に常時、病人を置かせるなんてことは「不当なこと」だと話す。クノックによれば困窮家庭は「病気」になってはいけない。一方、裕福な人達にはその裕福さによって治療は4段階に分かれている。

クノック：

私は治療を4段階に分けています。年収12000から20000フランの人たちには、最も安い治療で、週1回の往診と月におよそ50フランの薬代となります。年収50000フラン以上の人たちには、最高級の治療で、最低でも週4回の往診、X線、ラジウム、電気マッサージ、検査、毎日の薬代などで月300フランかかります。

パルパレはクノックが患者の利益ではなく、医者利益を追求しているのではないかと責める。

しかし、クノックは落ち着き払って、「患者の利益、医者利益を超える利益」があると言う。「医学の利益」だ。これこそを自分は追求しているのだと答えるのであった。ト書きによると、この瞬間から芝居の終わりまで、舞台の照明は次第に「医学的な照明 *Lumière Médicale*」の色彩を帯びてくる。この照明は「俗世間の照明 *Lumière Terrestre*」よりも緑と紫の光線が強い。

パルパレ医師は、クノック医師が最初に手がけたとするインド向け貨物船について3ヶ月前にした質問と同じ疑問を抱く。郡の皆をベッドにつかせるわけにはいかないのではないかという疑問だ。クノックは石鹸で手を洗いながら、次のように答えた。

クノック：

議論する余地はありますな。同じ家庭で5人が同時に病気になり、床についていた家庭を私は知っていますが、彼らは無事、乗り切りましたよ。あなたの非難は、近代的戦争は6週間以上続けることができないと主張した高名な経済学者を思い出させます。

実際には、私達には大胆さが欠けているというだけのことなのです。誰も、私にしてもそうですが、試しに徹底的にやってみて、住民を皆、ベッドにつかせようとしなただけの話なのです。試しにね！勿論、他の人達を看護するためにも、健康な人たちがいなければならないというのは認めましょう。それに病気の人たちのストックを用意しておかないといけませんから。

本質的にはクノックと同じ種類の人間であるパルパレは、彼の理論に納得する。そして、都市に移った自分の医院と、自分が捨てていったサン＝モーリスの医院を交換しようとクノックに持ちかける。しかし、この提案を知った町の人々は皆、憤慨する。「パルパレさん」が戻ってく

るなんてとんでもない。ここで住民が持ち出すのが、数年前のスペイン風邪のようなパンデミックにパルパレは対応できなかったし、今後もできないだろうという理屈である。このパンデミックの記憶については、後述することにした。

クノックは皆をなだめて、突然、パルパレのためにも病室が必要だと言い始める。パルパレ先生は「今日の午後、出発できるような状態ではなく、医学的には、少なくとも1日は休息が必要」だ。驚いたパルパレをクノックは凝視しながら、自分は真面目に話をしている、彼には24時間の休息が絶対に必要だと告げる。

パルパレは二人きりになったとき、クノックに先程のセリフは自分を助けるためのその場しのぎの言葉だったのだろうと言うが、クノックは自分にとっては自動的に行われている診断の結果だと答える。

クノック：

殆ど無意識のうちに行われてしまうのですね。誰かのそばによると、自動的に自分の中で診断がされてしまうのです。まったく無益で、時に不具合なのですが。

(秘密を打ち明けるように)

そのため、前から私は鏡の中の自分を見ないようにしているのですよ。

クノックは誰かと会うと、意識していないのに、肌、目の膜、瞳孔、毛細血管、呼吸、体毛などのほとんど知覚できない小さな兆候に気づいてしまい、自分の中の診断装置が自動的に動き出すのだと告白するかのよう話を続ける。パルパレは次第に自信を失っていく。彼は自分が病気であるかのように思い始める。クノックの診断は、自分の体のあれこれで気がかりにしていることと符合するではないか。クノックはパルパレをこの不安状態に置きざりにしたままにして去っていく。

クノック：

それは今は置いておきましょう。

(鐘がなる)

10時の鐘です。往診にいかなければ、よろしければ、昼食を一緒に取りましょう。

あなたの健康状態についてと、そこから決めなければいけないことについては、午後、私の診療所でゆっくりとご相談いたしましょう。

パルパレ医師は打ちのめされたように椅子に座り込み、深く考え込む。そこに町の人々が「医学的照明」のもと、儀式のように医療器具を運んでくるところで芝居は終わる。

6 パンデミックの記憶

さて、何故サン＝モーリスの人々はパルパレ医師が戻ってくることを拒み、クノックのほうを選ぶことになったのであろうか。そこにはパンデミックの記憶が影響していると思われる。舞台設定は1923年。1918年のスペイン風邪の大流行から5年しか経っていない。実際、作品中、スペイン風邪の話題はなんども登場しているのである。

1幕目でパルパレがサン＝モーリスでは誰も医院には来ないし、急死する患者くらいしかいないと話をしたとき、クノックは急死する患者を診るだけで財産を築いたわけではないでしょうと反論していたことを思い出そう。パルパレはまず風邪の患者が来ると話をした。それもただの風邪ではなく、世界規模に伝染していく風邪である。そのような風邪のおかげで彼は儲けることが出来たのだ。

クノックは、しかしそのような世界規模の風邪はハレー彗星のようなもので、100年後を待たなければならないではないかと心配する。パルパレは自分はすでに89年から90年にかけてと、1918年の大流行の2回を経験しているので、その点も心配いらなと言う。

パルパレ夫人も、1918年の大流行のとき、サン＝モーリスは大都市と比べると致死率が高かったと嬉しそうに話す。パルパレもサン＝モーリスの致死率は他の83県を超えるものであったと誇らしげである。サン＝モーリスの患者は治療には「死ぬ直前にしか来ない」ため、この年は「結構な収入」があったのだ。このように語るパルパレ医師が戻ってくるのを、パンデミックの記憶を持つサン＝モーリスの人たちは受け入れることは到底できないであろう。第3幕のレミ夫人の台詞が、町の人たちの心情を代弁している。

レミ夫人：

勿論、パルパレさんはいつも大変よい方でした。お医者さんが必要でないときには、他の方と同じくらいきちんと役割を果たしてくれましたから。ただ、疫病が蔓延したときだけは、困ったことになりましたけれど。スペイン風邪が流行しても、「本当の医者」がこの住民を死ぬままにしたなどとは、クノック先生ならば言わないでしょう。

この台詞ではクノックとパルパレの病気に対する態度の比較が行われている。レミ夫人は「スペイン風邪が流行しても、本当の医者がこの住民を死ぬままにした」とクノックならば言わないだろうと主張していることは、パルパレ医師はそのような台詞を言った、もしくは言うと思われるということを意味する。「本当の医者」であるパルパレが、「スペイン風邪に対しては住民を死ぬままにせざるをえなかった」ということは、パルパレの医師としての能力に疑問があるとしても、スペイン風邪の激烈さの証言であろう。実際、パルパレは「本当の医者」であっても「世界規模の疫病と戦える」ことはないと反論する。それは田園監視人²³が地震と戦うようなものだ。次のスペイン風邪が来た時、クノックだってそんなことは無理だろう。

しかし、レミ夫人はそれが可能だと断言する。今や、町の人々はク

ノックの指導により病気というものがどういうものであるかを知っており、病弱な人はすでに病院に収容されている。以前より準備ができていたのだ。

レミ夫人：

バルバレさん、私は車についてあなたと議論するつもりはありません。何も知りませんから。でも、私は病人というのがどういうものか、分かり始めています。

そして、虚弱な人がすでにベッドについているこの町は、あなたの言う世界規模の疫病にも毅然として立ち向かうことができるのです。

「虚弱な人がすでにベッドについているこの町」ならば立ち向かえるというのは、数年前のスペイン風邪の時には、ベッドが足りなかったということの裏返しでもある。

ここに来て、私達は愕然とせざるを得ない。

金儲けがなによりも重要で、「皆を病人にしたてあげる」怪しげな診察をしている「いかさま師」たるクノックと、「本当の医師」であるバルバレを前にした時、サン＝モーリスの人たちは「いかさま師」を選ぶのである。先述したようにジュール・ロマンはユナニスムにおいて、主人公が社会とぶつかり、融合する様子を描いた。そこで主人公は集団を時に「麻痺状態」から引きずりだす。「麻痺状態」から引きずり出された集団が、「いかさま師」を選ぶとはどういうことなのだろうか。

ここでクノックがサン＝モーリスにおいて実践したことを別の側面から眺めてみる必要があるだろう。

クノックは何を成し遂げたのか。

教育者と共同で、細菌とはなにかも知らない人々に、公衆衛生教育を行った（石鹸による手洗いが重要であるとも人々は認識した）。

町では酒と食事が節制され、朝夕の検温も実施されるようになった。

町の人々に無料診断を実施した。毎日、郡を車で走り回り、往診した。往診、治療は財力に応じて料金を変えて、貧困層からは何も受け取らない。

ホテルを臨時病棟に仕立て、虚弱な人が入院できるようにした。

その結果、5年前のパンデミックの記憶を引きずる人たちに、次のパンデミックに立ち向かえるという安心感を与えた

結果としてクノック、薬局、ホテルは大儲けができた。しかし、クノックの行為自体は悪くはないのではないか。むしろそれは町の人々にとって望ましいことであったというのも無理はないことではないか。それでは、クノックとは一体何者なのだろう。パルパレが言うように本当に「いかさま師」なのだろうか？

7 クノックは「いかさま師」なのか？

クノックという人物は、その人物像が明確になってきたように思われる瞬間に、私達の手をすり抜けていってしまう。喜劇とはジュール・ロマンによれば、その本質は滑稽さにある。それは「三分の一が空虚さ、三分の一が美德、三分の一が滑稽さ (1/3 vide, 1/3 vertu, 1/3 ridicule)²⁴」によって成り立っている。一つの側面だけに焦点をあてると、他の要素が後景に退いてしまう。この結果、喜劇は「真実らしく、悲劇より現実的に」見えるものとなる。「空虚さ」、「美德」と「滑稽さ」の3つは同居し切り離すことができないため、ジュール・ロマンの喜劇における出来事は非難されるべき出来事なのか、称賛されるべき出来事なのか、判断できない。そのようなことは現実においても頻繁におきる。いかさま師とされるクノックの行為も、それが本当に「いかさま」と呼ばれるべきものなのか、称賛されるべき行為なのかどうか、観客には判断ができなくなる。演じたジュヴェにとってもクノックが「謎の存在」でありつけたという話も首肯せざるをえない。

このようにクノックという人物、『クノック』の物語の解釈は難しい。

表面的には確かに喜劇である。だが、誰が笑われているのだろうか。「いかさま師」であるクノックであろうか、「本当の医者」であるパルパレ医師であろうか、クノックに丸め込まれていくように見える町の人々であろうか。見終えたあとでも分からない。

この問題を、保留にしていた「いかさま師」charlatan という単語の解釈をとおして最後に考察することにした。

1972年ジュール・ロマンが逝去したとき、作家のベルトラン・ポワロ＝デルペシュ (Bertrand Poirot-Delpech) が追悼文のなかで次のように述べた。

ジュール・ロマンが力量を見せつけ、神話となり、偉大なる喜劇作家たちと肩を並べ、モリエールのような、そう、モリエールのような作家となったのは『クノック』においてのことである。ジュヴェがお気に入りの芝居として、1000回以上も演じたのは偶然のことではない。医学の「いかさま」(le charlatanisme médical) が熱く告発されているだけではない。そこにはあらゆるプロパガンダ (宣伝活動) の濫用が予言的に暴露されているからである²⁵。

この追悼文は『クノック』において「いかさま、いかさま師」という単語が重要であると考えられていたということを示すものである。しかし、「医学のいかさまを熱く告発する」ことが『クノック』のテーマであったとだけ考えることは、作者ジュール・ロマンの意図を誤解するものだというのは今や明らかであろう。いかさまが告発されているとしても、「いかさま師」とされているクノック医師と、サン＝モーリスで25年間開業していたパルパレ医師の二人のどちらが告発されているのか、もしくは二人ともが告発されているのか、その答を少なくとも作者は提供していない。

表面上は、確かにクノックが「いかさま師」として告発されているように見える。「本当の医師」であるパルパレ医師は25年間住民のために

「尽くしてきた」のに、住民は自分を追放し、「いかさま師」を選ぶのかと憤慨しているからだ（第3幕）。

パルパレ医師：

よろしい。人生の25年を捧げてきた男に対する君たちの態度は言語道断だ。

サン＝モーリスは、もはや「いかさま」(charlatanisme)しか受け入れられないようだから、私はリヨンで誠実に生計を立てることにしよう。誠実に。

ここで仮に「いかさま」と訳した単語は charlatanisme だが、この単語は「いかさま師」charlatan に体系、職業、特性などを表す語尾 « -isme » がついて作られた単語である。もとの charlatan は、ロワイヤル仏和辞典では、以下のような意味だと説明される。

- [1] 山師, ペてん師, いかさま師
- [2] (昔の) 大道薬売り, 香具師 (やし)
- [3] いかさま治療師; やぶ医者
(ロワイヤル仏和辞典)

この単語は語源的にはイタリア語の *ciarlata* 「おしゃべり、うわさ話」という単語に由来する。つまり、charlatan は「話す」ことを重要な特性に持つ。しかし、ロワイヤル仏和辞典の定義ではクノックにおける charlatan の本質が理解できないのではないか。ここでクノックを「いかさま師」と呼ぶことに私達は違和感を覚え始めている。実は、この単語の定義は、フランスの辞書でも解釈が微妙にズレているため、正確に意味を取ることは難しいものである。

まず、フランスにおける単語の成立を見るために18世紀のリトレ大辞典を参照すると次のような意味が挙げられている。

1 広場、市で薬を小売する大道薬売り・香具師

Opérateur ambulancier qui débite des drogues sur les places et dans les foires.

2 何らかの秘密の知識を所有すると主張する経験主義の医者

Empirique qui prétend posséder certains secrets merveilleux.

3 民衆の信じやすさを利用する人々

Tous ceux qui exploitent la crédulité publique.

charlatan とは、もともとは広場などで口上を述べ、つまり話すことで、薬を売っていた人を指す単語であった。分かりにくいのが2の「何らかの秘密の知識を所有すると主張する経験主義の医者 empirique」であるが、「経験主義の医者」というのは、やはりリトレ大辞典によると古代、教条主義者 dogmatiste と対立し、経験に基づく事実のみを参照した医者のことを指した。彼らは教条主義的論理と同時に解剖学の知識も否定した。

しかし、ここで重要なのは3番目の定義として挙げられている「民衆の信じやすさを利用する人々」であろう。勿論、これも民衆が好むような言説(話す行為)を駆使して、民衆の信じやすさを利用した人ということになる。「政治上のシャルラタン」Un charlatan politique という例文が挙げられている。この3番目の定義は、ロワイヤル仏和辞典の定義とズレがあるように見える。「3 民衆の信じやすさを利用する人々」は、ただちに「【1】 山師, べてん師, いかさま師」とはならないからだ。

それでは現代フランス語における定義ではどうだろうか。アカデミー・フランセーズとラルースの辞典で調べてみよう。まずアカデミー・フランセーズで調べてみると、この単語の意味は18世紀からそれほど意味が変わっていないことが分かる²⁶。

1. (古) 大道芝居の舞台にたって、口上とともに薬を売る移動販売人

Anciennement. Vendeur ambuland qui montait sur des tréteaux pour débiter ses drogues avec force boniments.

2. (今) (軽蔑語) 魔法の治療法を知っていると主張し、民衆の信じやすさを利用する治療者

(比喩的に) 言葉や約束を並べ立てることで、強い印象を与え、自分を売り込もうとする人

Aujourd'hui. Péj. Guérisseur qui exploite la crédulité publique en prétendant posséder des remèdes magiques. Fig. Celui qui cherche à en imposer, à se faire valoir par un grand étalage de paroles, de promesses.

アカデミー・フランセーズの辞典による定義でも、やはりロワイヤル仏和辞典にある「1 山師, ぺてん師, いかさま師」「3 いかさま治療師; やぶ医者」という定義には直接には結びつかないように思われる。それに対して、ラルース辞典の定義では、ほぼ「3 いかさま治療師; やぶ医者」と同じ定義が登場しており、興味深い²⁷。

1. かつて公共の広場で、仰々しい口上、冗談とともに、薬を売ったり、歯を抜いたりなどした人

Autrefois, personne qui, sur les places publiques, vendait des drogues, arrachait les dents, etc., avec un grand luxe de discours, de facéties.

2. 商品、知識、身分などを自慢し、人々の信じやすさを利用する人
Celui qui exploite la crédulité publique, en vantant ses produits, sa science, ses qualités.

3. 知識がなく、誠意もない治療師や医師

Guérisseur ou médecin ignorant et sans conscience.

4. アフリカで占い師、祈祷師、呪術師

En Afrique, devin, guérisseur, sorcier.

この3番目の「知識がなく、誠意もない治療師や医師」という定義は、アカデミー・フランセーズの「魔法の治療法を知っていると主張し、民衆の信じやすさを利用する治療者」から踏み込んだ定義となっているが、「3 いかさま治療師；やぶ医者」とかなり近い。しかし、ラルースのこの定義でも「いかさま師、ぺてん師」と訳すことは難しい。

このラルース辞典では、charlatan の同義語として esbroufeur (vieux), hâbleur, imposteur という単語を挙げている。これらはそれぞれロワイヤル仏和辞典では「はったり屋」、「ホラ吹き」、「詐欺師」と定義されている単語である。確かに同義語がこのように定義されているのならば、charlatan の定義として「【1】 山師, ペてん師, いかさま師」というのもあり得る。しかし、ここでもロワイヤルの解釈にはズレがあるように見えるのだ。

ラルース辞典を再び参照するとこれらの単語は以下のように定義されている。

hâbleur

多く話し、自慢する人。自分をより高く見せようとする人

Qui a l'habitude de parler beaucoup et de se vanter, qui cherche à donner une haute idée de sa personne.

imposteur

ニセの見せかけで騙す人、誰か別の人のように見せかけること

Personne qui trompe par de fausses apparences, qui se fait passer pour quelqu'un d'autre.

hâbleur は「自慢する人」であって、これは「ホラ吹き」のこともあるが、「ホラ吹き」は必ずしも皆が「自慢する人」となるわけではない。imposteur も「なりすまし」とでも訳すべき単語であって、「詐欺師」を直接指し示す単語ではない。

このように見えてくると、やはりロワイヤル仏和辞典の charlatan の定義をそのまま採用するべきではないように思われる。charlatan はロワイヤルの定義にある「ぺてん師、いかさま師」のように直接的に犯罪にかかわる人物を指し示す単語ではない。あくまで「話すことで、人々の信じやすさを利用する人」という意味がもとにある単語だ。「口がうまい人間、口上手」とでも訳したほうが良いのではないか。もしくは、そのまま「シャルラタン」としておくべきかもしれない。

クノックはぺてん師、いかさま師、やぶ医者 of 類ではない。彼はこれまで「誰も死なせたことがない」医者である（通常「健康」と言われている人々を「病気」と診断するから）。アルコール中毒患者には、アルコールを禁止するなど、彼の治療法は必ずしも間違っているわけでもない。サン＝モーリスという町の公衆衛生に大いに役に立ち、町の人々に次のパンデミックを迎え撃つことができると思わせるだけの知識を身につけさせた。クノックは「やぶ医者、いかさま治療師」「ぺてん師、いかさま師」というより、金儲けを大事にする「口上手で、民衆の信じやすさを利用する医者」と考えるべきであろう。ただ、多くの医療行為がそうであるように、クノックの診断なり治療法なりが正しいか、間違っているかは患者には（そして観客にも）判断することが難しいだけである。

さて、『クノック』という喜劇は大成功を取めたが、当然、医学界からの評判は悪かった。ジュール・ロマンは、ある講演会で医者たちに対して釈明をすることにした。彼は、自分はクノックに会ったことがあると主張する。その結果、自分の病気が判明したので、今の自分いるのもクノックのおかげだと彼は言うのである。

道端で砂粒が目に入ってしまったとき、私はクノックに出会いました。まぶたをひっくり返し不器用に砂粒をとろうとしているところに、素晴らしいトープード車に乗った彼が通りかかったのです。彼は車を止め、白目を調べると、私の膝臓が機能不全に陥っていると診断しました。私は床につかなければなりませんでした。この病気はまだ治っていません。今や私にとっては慣れ親しんだ不可欠な病気です。この病気無しで、人生が生きるに値するかどうかは疑わしいものです²⁸。

『クノック』について残されているジュール・ロマンの証言は、後に発表された後日談を除けばこれだけしかない。しかし、ジュール・ロマンのこの釈明は、まさに空虚さ、美德、滑稽さが混じり合いながら構成されているクノック的体験と言わざるを得ない。そこでは何が真実なのか、虚構なのか、何が正しいのか、誤りなのか、誰にも分からない。全ては謎のまま残されているのである。

結び

ジュール・ロマンの1923年の喜劇『クノック もしくは医学の勝利』は大成功を収めた。しかし、主演したルイ・ジュヴェが述懐しているようにクノックという人物は謎にまつまれている。作者は喜劇が「真実らしく、現実的」なものであるべきであり、「三分の一が空虚さ、三分の一が美德、三分の一が滑稽さ」によって成立するべきだと考えていた。そのため現実と同様に、喜劇における事象は様々な側面を持つ。一つの側面だけに焦点をあてると、他の要素が後景に退いてしまう。主人公のクノックにしても、金儲けだけを考える「いかさま師」と捉えることはできない。健康な人間などいないと考え、必要な人間以外はベッド送りにする彼の診察・治療は確かに胡散臭いものであるが、無料診断を行い、

貧困層からは診察料も受け取らない、人々の公衆衛生意識向上を促すなど、結果をみれば、全てが悪いものであったと言い切ることは難しい。町の人々も「本当の医者」ではなく、クノックのほうを選択するまでに至るほどであった。クノックの解釈をさらに複雑にした要因として、クノックがそうであるとされている *charlatan* という単語の意味が揺れ動くものであるということもあった。この単語は日本語では「山師、ペてん師、いかさま師」と訳されることが常であるが、フランス語においては犯罪と直接関係があるというより、「口上手で、民衆の信じやすさを利用する」人物という意味でしかない。「シャルラタン」と訳すしかないような単語である。このシャルラタンの行為は、害をもたらすこともあるかもしれない。しかし同時に益をもたらすこともある。「広場、市で薬を小売する大道薬売り・香具師」の薬の全てが害となるわけではない。シャルラタンたるクノックはまさに、「三分の一が空虚さ、三分の一が美德、三分の一が滑稽さ」を体現する者であったと言えよう。このようなシャルラタンが活躍することが出来たのも、スペイン風邪というパンデミックが背景にあったからであった。スペイン風邪が大流行した時、「本当の医者」であっても患者が「死ぬのにまかせるまま」しかなかった。パンデミックのように誰にも正解が分からない状況においては、「口上手で、民衆の信じやすさを利用する」人物が、人々からの信頼を得ていく。勿論、シャルラタンに従った結果が良いものになるのか、悪いものになるのかは分からない。しかし、少なくとも人々に次のパンデミックに準備ができていと信じさせることができる。このような 100 年前の世界の姿が、『クノック』にはカリカチュアとして残されていると読むことが可能なのである。さて、このクノックの姿は 100 年後の今の私達に有益な教訓を与えてくれるだろうか。何かを教えてくれるかもしれない。何も教えてくれないかもしれない。謎のままである。しかし、それこそが作者が意図したことなのである。現実がさまざまな側面を持つように、この『クノック』という喜劇もさまざまな側面を持つのだ。

注

- 1 諏訪正『ジュヴェエの肖像』共立出版、1989年、p. 391。
- 2 2017年には、オマール・シー (Omar Sy) 主演の映画『クノック』が公開されたが、この作品は原作の設定を借りているものの、自由なアレンジが施されている。
- 3 Jules Romains, *Knock ou le Triomphe de la Médecine*, Edition d'Annie Angremy, "folio théâtre", Gallimard, 1993, p. 145.
- 4 <https://www.universalis.fr/encyclopedie/georges-carpentier/> 2022/1/3 参照
- 5 Annie Angremy, *op. cit.*, p. 160.
- 6 *Ibid.*, p. 12.
- 7 *Ibid.*, p. 13.
- 8 *Ibid.*, p. 14.
- 9 諏訪正、前掲書、p. 392。
- 10 同上書、p. 394。
- 11 クロムランク (Fernand Crommelynck) は、ベルギー出身の戯曲家で、1921年の『堂々たる寝取られ亭主』 *Le Cocu magnifique* は大成功を取めた。この作品は46年にはジャン＝ルイ・バロー (Jean-Louis Barrault) 主演で映画化された。岸田國士は「欧洲大戦後、即ち千九百二十年から二十三年にかけて、仏蘭西の劇壇は空前の開花期を現出し、その間に、有為な新作家が相次いで『問題になる作品』を発表した。クロムランクの『堂々たるコキュ』と、ジャン・ジャック・ベルナルの『マルチヌ』とは、サルマンの『幻の魚』などと共に、当時の批評壇を賑はしたものである」と述べ、『マルチヌ』の方はすでに感心できないものとなったが、『堂々たるコキュ』の方は相変わらず面白い」と評価している(「クロムランクとベルナルに就いて」岸田國士『岸田國士全集 21』岩波書店、1990年、p. 236)。
- 12 岩田豊雄『岩田豊雄演劇評論集』新潮社、昭和38年、p. 444。
- 13 同上書「和洋『クノック』」p. 147。
- 14 同上書 p. 429。
- 15 同上書 p. 144。
- 16 同上書 p. 443。
- 17 同上書「和洋『クノック』」、p. 147。
- 18 Louis Jouvet, *Témoignages sur le théâtre*, Collection « Champs arts », Flammarion, 2021, pp. 138-139.
- 19 岩田、前掲書、pp. 147-148。
- 20 岸田國士『岸田國士全集 21』岩波書店、1990年、pp. 109-111。
- 21 諏訪正、前掲書、p. 393。
- 22 Charles-Olivier Carbonell et Jean Rives, *Histoire lère: hier le monde*, Delagrave-Collection Aldebert, 1982, p. 195.
- 23 園田監視人 le garde champêtre : 農作物の管理や密猟の取締りに当たる町[村]役人。地方自治体の治安維持が目的で設置された役職で、武装が許可されていた。地方の何でも屋であり、20世紀初頭は、町の太鼓たたきまで務めた。

- 24 Annie Angremy, *op. cit.*, p. 15.
- 25 Bertrand Poirot-Delpech, L'AUTEUR DE " KNOCK " ou les joies de l'imposture, *Le Monde*, le 19 août 1972. https://www.lemonde.fr/archives/article/1972/08/19/l-auteur-de-knock-ou-les-joies-de-l-imposture_2399850_1819218.html 2021/08/29 閲覧
- 26 <https://www.dictionnaire-academie.fr/> 2021/09/21 参照
- 27 <https://www.larousse.fr/> 2021/09/12 参照
- 28 Louis Jouvet, *op. cit.*, p. 120.

